天理教伝道史の諸相（18）

熊本、長崎、佐賀の天理教

天理大学附属天理図書館
天理教文献室
早田　一郎　*Ichiro Soda*

前回に続いて九州の天理教伝道について記す。今回は熊本、長崎、佐賀３県とする。ただし対馬や五島の中通島などについては次回に「宮崎、鹿児島および九州の島嶼地域の天理教」（仮題）で触れることとする。

熊本は「肥後もっこす」、長崎は中国やオランダの影響で独特の文化を育み、佐賀は「葉隠れ」と言われる。いずれも県民性の全てを言い表したものではないがひと言でいえばこうなろう。３県の伝道もこのそれぞれの県民性が何らかの影響を与えているかも知れない。

３県の教会数を人口比で比較すると、佐賀、長崎は九州では多いほうに入り熊本はやや少ない（前々号参照）。

では熊本から。本連載前々号「九州の天理教（概観）」で述べたが九州で最も早く天理教が入ったのが熊本であった。明治 18 年のことだから教会制度のない時代である。大阪の泉田籐吉の世話で熊本県人友井常八は御在世時代の教祖にお目にかかった。優しい尊顔を拝し信仰心を固めた。熊本へ帰った友井は以前からの知人堤豊賀ににおいを掛け、大阪からは天龍講（後の郡山大教会）の井村徳次郎が派遣され本格的な熊本布教を始めた。

その後は堤と友井が中心となり、明治 27 年熊本支教会を設置。長崎、佐賀、福岡方面への伝道が盛んとなり、現在では熊本県より３県のほうに教会が多くなった。

熊本県にはもう一つ、東肥大教会がある。東肥は堤、友井と共に井村徳次郎のもとで信仰していた山内治三郎が別に作った教会である。山内は明治 19 年頃から盲目になり救いを信仰に求めていたが、明治 21 年井村に出会い入信した。

山内の信仰は介添えをする人たちをも感化し次第に熊本市内をはじめ県内各所に広まった。明治 27 年教会設置の折には九州支教会という名称で本部のお許しを頂いたが、大きすぎるとの懸念から地方庁申請時に東肥とした。明治 29 年の内務省訓令は本教に大きな影響を及ぼしたが東肥に関しては官憲が「盲目の天理さん」と親しみを持ち、厳しい取り締まりをしなかったという。訓令下では珍しいことである。

その他、熊本には筑紫系統の教会が多い。朝倉、西海を合わせ 35 カ所の教会がある。すでに述べたが千歳、南筑、渡瀬とつながった信仰が熊本県天草に入り天島分教会となった。天島には 20 カ所の教会があるが、その所在地は２カ所を除いて天草近辺と鹿児島県である。筑紫大教会から福岡県内を南漸し熊本県、鹿児島県へ伝わった伝道線は直方（筑紫大教会）から南へ南へと伸びた。伝道伸展の一例として興味深い。

長崎県の全教会を大教会ごとに分けると長崎県にある肥長大教会 28 カ所と熊本大教会 26 カ所が多い。しかし、それ以上に多いのが防府大教会（山口県）の 33 カ所である。防府－佐波系統中通分教会などで五島列島中通島近辺に多い。なお中通を含め対馬、奄美諸島の天理教については次号に触れる。

さて、長崎県で最も早い伝道はどこから入ったのであろう。熊本大教会の伝道が明治 22 年に島原に伝わったという。おそらく最も早い信仰であろう。堤豊賀の元で信仰を始めた宮崎市郎が郷里の島原に伝え、それを受け堤と友井が本格的に布教した。一方、教会として一番古いのは明治 26 年設立の名京部属佐世保分教会である。明治 24 年、当時の山名系信者が軍人として佐世保軍港に転勤し住まいを借りていた人ににおいをかけた。

現在、熊本大教会系の伝道で島原に始まったものは有明分教会となり、翌明治 23 年に伝道が開始された長崎市への伝道は長崎分教会となっている。

長崎県で唯一の大教会である肥長は奈良県治道大教会の矢追楢蔵が熊本で布教中に長崎にも出向き布教した明治 28 年に始まる。その後奈良県治道村出身の橋本梅太郎が中心となり明治 32 年に出張所設立、昭和 16 年に大教会になった。

他に長崎県で目立つのは、芦津系 14 カ所の教会であるが、その全てが島原分教会所属で、内 11 カ所が島原半島にある。

以上記したように長崎県への伝道は防府－佐波系中通、治道系肥長、熊本系長崎と有明、芦津系島原が主なところである。

ところで教祖は「東京々々、長崎。」と仰ったと伝えられる（『稿本天理教教祖伝逸話篇』127）。東京や長崎のような遠い所へ伝道することを示唆されたものであろう。長崎県には上に記した教会系統の他、中和、郡山、高知、治道などからの伝道もかなりの成果を挙げ、多くの系統が長崎伝道を試みている。関西など遠方からの布教師は遠い長崎への伝道に際し、教祖のお言葉を思っていたのかも知れない。

佐賀県の全教会を大教会ごとに分けると岡 29 カ所、熊本 18 カ所、国名 18 カ所、鎮西 15 カ所の順になる。岡、熊本、国名と鎮西を含む筑紫系（鎮西、筑紫、朝倉、西海）を合わせると 100 カ所に近く、佐賀県全体の約７割を占める。

佐賀県に最も早く信仰が伝わったのは国名系統か熊本系統のどちらかであろう。国名は明治 25 年撫養の布教師天満益右衛門の伊万里、唐津布教が始まりである。その後を実弟柏原源次郎（名東大教会２代会長）が受け継ぎ、明治 33 年船宮分教会が設立された。一方、熊本系統も明治 26 年３月に郡山大教会の平野楢蔵が熊本を訪れた時、すでに佐賀にも信者がいたといい（『天理教郡山大教会史』第１巻）、明治 28 年には佐賀分教会が設立された。名東－国名系と郡山－熊本系はどちらが早かったのか明確ではないが、ほぼ同じ頃に佐賀県に入ったといえる。

岡大教会系統の伝道は明治 31 年、奈良県飛鳥（明日香）の森川ルイが船で長崎県平戸島に降り立ち布教を始めたことによる。その後佐賀県や福岡県に伸び、佐賀県では東松浦分教会として発展した。佐賀県内岡系教会 29 カ所の内、東松浦が 23、福岡県西北分教会の教会が６である。

熊本大教会も佐賀県に 18 カ所の教会を有すがその内 14 カ所が佐賀分教会所属である。

なお、余談だが熊本県にある二つの大教会である熊本と東肥は同じ郡山系統として始まったが、その伝道線の伸びた先は全く別方向であった。すなわち熊本大教会は熊本県より他県に多く、長崎、福岡、佐賀と北および西方向に多く伸びた。それに比べ東肥は熊本県内と鹿児島、沖縄と南へ伸びている。同じ根を持つ二つの大教会だが伸びた方向が全く別であり、結果的に伝道線を分担した形になった。

（本稿の教会数は『天理教教会所在地録』立教 173 年版によった。現在は若干異なるかも知れない）